

## 朗 読 文

家の近くにクヌギ林がありました。

この林は、幼い者たちにとつては、たくさんの喜びの宝庫でした。

夏のクヌギ林には、緑色や金色のコガネムシ・カミキリムシ・カブトムシがひそんでいました。

特に、カブトムシのさまざまな種類を集めることが、幼い者たちの誇りでした。カブトムシは、その角形や体の形によって、それぞれ名前がつけられていました。かぶとのくわ形そっくりの形のよい角をつけているのが義経。弁慶というカブトムシもいました。これは、カブトムシの中ではいちばん大形で、コガネムシの親玉みたいになかっこうをしていました。角のつき方も、ほかのカブトムシとは違っていました。どのカブトムシも、その角は横に並んでついているのに、角が、この弁慶のは縦になってついています。ほかのカブトムシの五分の一ほどの小さな角、全く見映えのしないのが太閤。太閤といえは豊臣秀吉のことで、たいそう派手な武将であるはずなのに、この見映えのしないカブトムシに太閤と名づけるなんて、少年たちも皮肉なことをしたものです。角が際立って大きく、角の先に枝もあり、角そのものも、ただ真つすぐに突き出ているのではなく、ぐいとカーブがついてハイカラで華やかなのには、梶原という名がつけられていました。

どの子供たちも、菓子箱におがくずをつめ、その上に酒をふりかけ、この中にカブトムシを飼っておくのでした。子供たちは、このカブトムシを使って、どうするということでもありません。ただ飼っておくだけでした。

けれど、このカブトムシを林の中で見つけた時の喜び。心臓がドキドキ跳つて、その音がはっきり聞こえるほどの喜びを感じるのです。喜び以外のものは何も入り込まないほど、喜びだけで心がいっぱいになるのです。

冬のクヌギ林は、山膚を深々と覆いつくすほど厚く、金の落ち葉が積もっていました。林の木という木はことごとく裸になって、太陽は木々の根元まで差し込んでいます。日に照らされた林の落ち葉は、純金の色に輝きます。その落ち葉の上に、木々の影はうす紫のしま模様をつけるのでした。

林の中には、小さなくぼ地があちこちにできていました。そういう所には、特に落ち葉が深く積もっていました。落ち葉はパンパンするほど乾いていて、太陽の匂いを漂わせていました。

そういう落ち葉の中にひっくり返ると、太陽を吸い込んだ落ち葉が、温かく体をくるみこんでくれます。体の周りからは、太陽のおいがいっぱい立ちのぼるのです。くぼ地には冬の冷たい風も吹き込んできません。

ここは、冬のない美しい不思議な別世界のような気がするのでした。

ミノムシみたいに、温かい落ち葉にくるまって、ぼかんと空を見上げているだけでよいのです。ただもうそれだけで、金色の輝いた幸福が心の中に大きく広がっていくのでした。